

圖版要項

一三 御物聖德太子像 及部分

紙本着色 挂幅装 一〇〇・九釐(三尺三寸三分)
 横 五三・七釐(一尺七寸七分)
 参照 龜田孜「御物聖德太子御影考」

四一七 聖觀音像 兵庫 鶴林寺藏

銅造

この聖觀音像はわが國の上代に於ける彫刻の中で最も美しいものの一つとしてよく人々に親まれてゐるもので、またその製作についても之を奈良時代前期のものとして殆ど疑ふものがゐない。たしかに本像の如く未だ寫實からかなり遠く、而かも普通の飛鳥時代のものよりはずつと柔味が多くなつてゐる様なものを、丁度飛鳥から奈良時代への過渡的な作例とするのは一應、尤もな様に思はれる。

しかし奈良時代前期と云ふものをよく考へ直してみると、そこには前代飛鳥の餘影と共にまた奈良の前驅的な要素もあつて、それは矢張り過渡期としての特色を充分に示してゐるが、その前代の餘影とは要するに飛鳥様式の末流を稱するものであり、また奈良の前驅とは初唐様式の新しい傳來を指すもので、その間に特に一つにまとめられた一概念としての過渡的なものが見受けられるわけではない。即ち前者の作例には白雉二年(辛亥年、西紀六五一年)の御物觀音菩薩像と天智天皇五年(丙寅年、西紀六六六年)の野中寺彌勒菩薩像とがあり、これ等は飛鳥様式がかなり寫しくづされてゐるか、若しくはその形式的な固化に陥つてゐるもので、そこには殆ど正しい意味に於ける様式の發展と云ふ程のものを見ない。また後者の作例としては天武天皇六年(西紀六七八年)の舊山田

寺講堂藥師三尊像と同八年(西紀六八〇年)の藥師寺金堂藥師三尊像と同九年(西紀六八一年)の當麻寺金堂彌勒佛像等があり、これ等は純粹な初唐様式が殆どそのまゝに傳へられてゐるもので、そこには未だわが國で附け加へられた要素は聊かも認められない。従つてこの孝德天皇から天武天皇頃にかけての諸作例にはその系統を異にする新古兩様の様式が並び行はれてゐたわけで、その間に何等の融合的な關係も生じてゐなかつたことが知られる。

こんな頃に果してこの聖觀音像の様な様式が造られ得るであらうか。こゝに改めて本像の様式がもつ幾つかの著しい特色を拾つてみると、ほど次の様なものが挙げられる。即ちその第一は本像の面相姿態が未だ寫實からはかなり遠い抽象的な造型をなしてゐることである。尤もその圓滿な面相は極めてよくよくで、またその偏立の姿態は充分に柔味のあるものであるが、それ等の造型の基礎は決して寫實ではない。それは純粹な寫實から脱化した唐様式とは著しく違つた理念をもつてゐるものである。そしてそれはまた飛鳥様式の極めて抽象的な造型とも全く趣を異にするものである。その第二の特色は天衣や裳の衣文線である。これには全體としてかなり寫實的なところがあつて、やゝ初唐様式に近いものが見られる。しかしその左右兩側を垂れ下つてゐる天衣には六朝の北周様式に似た僅かの鰭型をなしてゐるのが目立つてゐる。これを飛鳥様式の名残りとするのは決して當を得たものとは思はれない。その第三の特色は頭上の三面裝飾冠と胸上の瓔珞と腹部のやゝ大形な花型裝飾とである。これ等はかなり美しく造られてゐるが、唐代のものに進步したものではなく、矢張り一種の古様をもつて六朝の北齊や北周の系統を引くものと思はれる。第四の特色は本像の側面觀が極めて偏平なことである。これはわが飛鳥様式の一つの著しい特色ともなつてゐると共に、また六朝の北魏を始め北齊や北周にも一般的に見受けられるものである。

これ等の特色を綜合してみると、この觀音像の様式は六朝の北齊や北周など

の中部系統を主として傳へられてゐるもので、それは未だ初唐様式に至らない頃のものであることが判る。換言すればそれは僅か三代三十七年間の命脈しかなかった隋代の一様式の流れを汲むものと云ふことが出来る。そしてこの隋様式とは一方に北齊や北周などの中部様式の系統を引いてゐると共に、また他方に極めて短い期間の中に完好な初唐様式に發展して行つたもので、それ自身一種の過渡的な要素を具へてゐるものである。

然らばかゝる隋様式がわが國に傳へられ得る可能性があつたのは果して何時頃であつたかを考へてみなければならぬと思ふ。その隋とわが國との間に公の交渉があつたのは推古天皇十五年(隋大業三年、西紀六〇七年)と翌十六年と同年(西紀六〇八年)である。そして隋が唐の高祖によつて滅ぼされたのがわが推古天皇二十六年(西紀六八八年)であるから、餘程特殊な事情がない限り、隋の彫刻様式は矢張り、推古天皇二十六年以前に傳へられたものと考へなければならぬ。こゝに考へ合せられるのが本像を傳へてゐる鶴林寺である。この鶴林寺とは現在、兵庫縣加古郡加古川町にあるもので、その縁起について寺傳に聖德太子の建立と傳へられてゐる他は別に正しい記録にその建立などを記したものがなく、従つて本寺の縁起沿革については殆ど何も知ることが出来ない。しかし天平十九年の法隆寺伽藍縁起并流記資財帳によると、聖德太子が推古天皇六年(西紀五九八年、書紀によれば推古十四年)に法華經と勝鬘經とを講じて、それによつて播磨國佐西地を賜つてゐることが見えてゐるのであるから、鶴林寺の在る播磨の土地と聖德太子との密接な關係は充分に推察することが出来る。因つてその頃から果して鶴林寺と云ふ寺が建てられたか否かは明らかでないが、そこに聖德太子に關係ある一軀の觀音像が存在することはさまで不當ではないと思はれる。こんな事から考へてみると、この聖觀音像の製作はどうしても飛鳥時代としなければならぬ。これは從來の通説と大分に違ふので、是非識者の御批判を

仰ぎたいと思ふ。尤も様式史的にこんな結論を導き出して來るのにはわが飛鳥時代の彫刻様式を全般的に考へなければならぬし、またその母胎となつた六朝の北魏や北齊や北周や南梁等の諸様式をも参照しなければならないが、それは一應、先頃發表した國立博物館學報第十冊の拙著「御物金銅佛像」を見ていただきたいと思ふ。

鶴林寺聖觀音像法量

總高	一〇四釐	像高	八三釐二
頭長	一八・五(髻トモ)	面長	九・〇
面幅	一三・八(髻ナシ)	面奥	一〇・三
頸幅	九・〇	肩幅	一九・〇
胸周	八・二	腰幅	一五・〇(最大部)
腰周	三四・〇	臂張	二五・〇
腹奥	四二・七	裾張	一四・五
天衣張	一二・五	脚長	四一・〇
膝張	二五・七(最大部)	眼幅	右三・一 左二・九
鼻長	二二・八(先端)	口幅	二・七
耳長	一〇・八	掌長	七・二(右)
足長	右七・〇 左七・一	蓮肉經	一四・四(左右)
蓮肉高	九・五	冠高	一四・〇(前後)
冠幅	六・〇	化佛高	六・五
耳飾高	五・〇	耳飾幅	三・三
	六・三		四・六

(小林 剛)